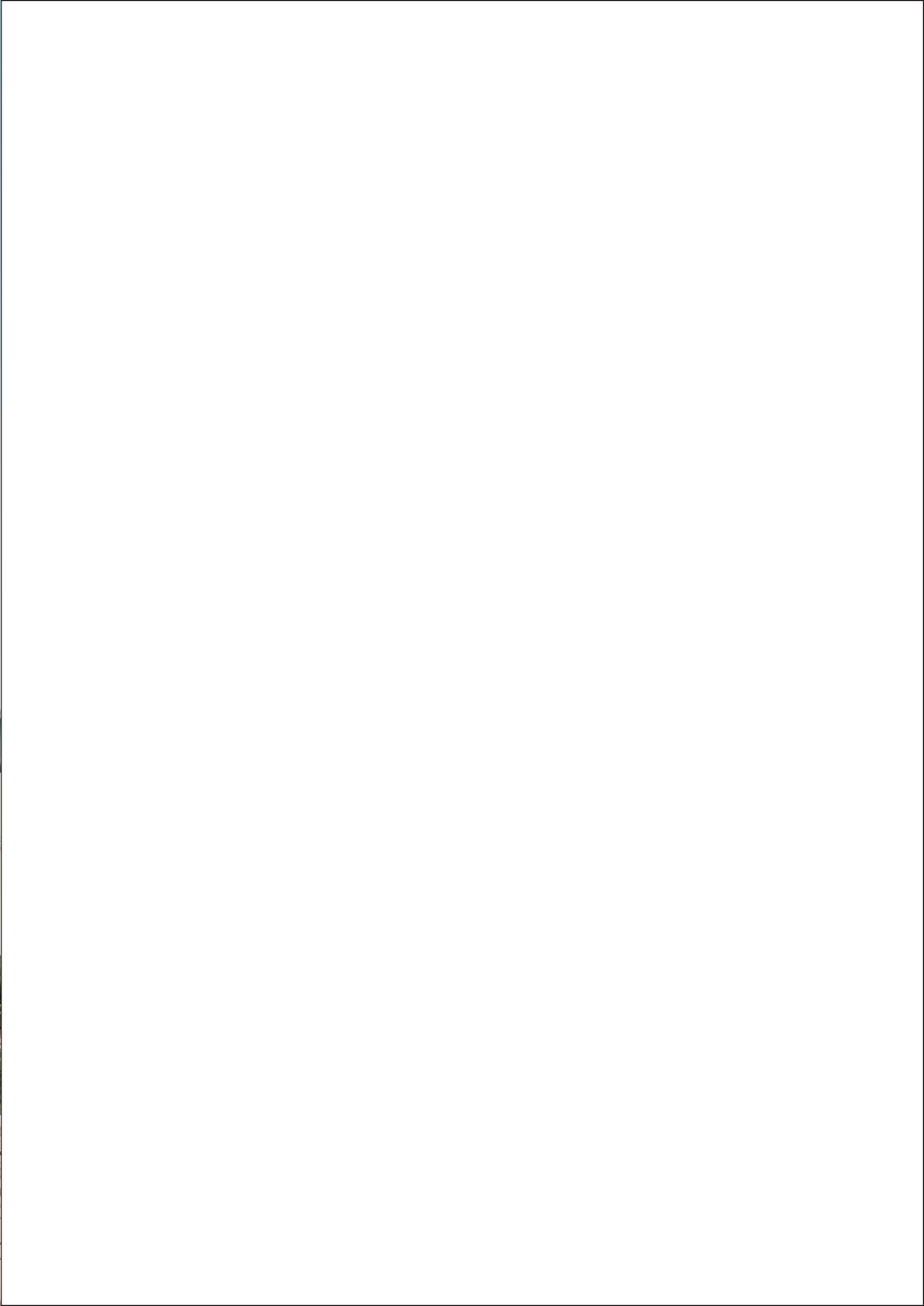


アーバンファーマーミング運動で都市と人々を元気に！

JVEC
Japan Vegetable Community

アーバンファーマーミング運動で都市と人々を元気に！



1 メッセージ

一昨年(2015年)9月に私達思いを共にする者が、一般社団法人ジャパンベジタブルコミュニティ(JVEC)を設立しました。JVECの理念は以下の3つです。

1. 都市住民が自らも有機野菜を育て、栽培者同士のコミュニティを形成していくことにより、心身の健康を促進し、豊かな社会をつくる
2. 屋上菜園等の活動により、都市の中に緑のスペースを広げ、自然を回復していく
3. 農業生産者と消費者の交流を促進し、相互支援の関係を創る

以上の理念に基づきスタートした JVEC は幸いなことに、今年の4月から都内2か所で屋上菜園関係の活動を開始することができました。

①三井住友海上火災保険株式会社本館の屋上菜園での貸出菜園利用者への栽培指導

②株式会社ルミネ北千住店の屋上菜園の栽培受託

また島根県の新規就農者(エゴマ栽培農家)の支援活動にも取り組み始めています。

JVEC は都市住民が野菜をつくるだけでなく、農作業をする意味、さらに農的なものを持っている多様な価値を開発することを目的としています。

遡ること2007年、都心の屋上で野菜づくりを推進する団体が設立され、私も初代メンバーとして参加しました。

この団体は東京都心で「地産地消」を実現することをスローガンにしていました。江戸時代、当時世界的大都市である江戸では土地柄を活かしたいろいろな野菜が栽培されていました。それをモデルにして都心で野菜づくりをしよう、しかし、都心には畑にするような土地がないので、ビルの屋上を利用しようということで、屋上での野菜づくりが実験的に始まりました。その団体のメンバーの中で実際に野菜づくりをしている

のは私だけだったので、私は屋上での栽培技術担当となりました。

ところが屋上での野菜栽培は露地での栽培と同じようにはいきません。まず第一の理由は土の深さです。建物には荷重条件があり、さらに地震力荷重という厳しい制限もあります。

屋上菜園用に開発された軽量有機土壌でさえ、水を飽和状態迄含むと10cmの深さで100kg/m³となります。

最初は10cmの土で野菜が栽培できるものだろうかと思心暗鬼でしたが、屋上菜園用の有機土壌を開発した土のメーカーの責任者の説明では、「できる」ということでしたので、「それならやってみよう」ということで10cmの土で夏野菜、秋冬野菜の栽培に取り組みました。やってみるといろいろな問題がでてきました。一つ一つ挙げますとキリがありませんが、直面した大きな問題は3つありました。

①軽量土壌なので、野菜を支えるための支柱がしっかり立てられない。トンネル掛けすることもできない。特に屋上は風が強いので、風対策は最も重要なことの一つです

②土が浅いため乾燥しやすい。一方土の性質でしょうが、表面が皮膜のようになって水を撒いても土の中に浸透していかない

③土が浅いため野菜を栽培した後劣化しやすく、土の地力の回復、養生の仕方がむずかしい。有機栽培は微生物の力を活かすことがポイントになりますので、微生物の活性を高める土づくりが、屋上菜園での継続的栽培を大きく左右することになります

以上の問題というか課題に取り組んで10年。毎年一定の成果は上げていきましたが、やはり試行錯誤の連続でした。屋上菜園用の資材もいろいろ開発していきました。一方近年の野菜栽培ブームを反映しているのでしょう、有機栽培関係の本が次々と出版されるようになりました。大変参考になっています。

問題を感じつつも、一方で軽量土壌の良さ、ポジティブな面も感じています。それは「根の呼吸」という点です。根が十分に空気呼吸できる、ということは野菜にとって良いことではないか。これは私なりの研究テーマとなっています。

10年やっても農業の世界では、まだ10年しかやっていないということになりますが、私なりに屋上菜園に限ってですが、また初歩的ですが、屋上菜園栽培技術の標準化のメドがついたように感じています。

今年の夏、ルミネ北千住店の屋上菜園では約8m²の菜園面積で42個の小玉スイカを収穫することができました。今まで10年間やってきましたが、42個は新記録でした。

現在目標にしていることは「屋上でもそれなりにできる」、ではなく、「露地栽培以上にできる」です。「屋上でもこんなにできる、すごい!」と思って頂ければ、屋上で野菜栽培をする人がもっとも増えてくと思うからです。

以上は栽培技術に関するのですが、都市に住んでいる人が、また働く人にとって野菜栽培はどのような農的価値を持っているでしょうか。

第一にメンタルヘルス効果です。野菜を通して、人は土に触れ、自然に触れ、元気をもらうことができます。部屋の中の窓辺の鉢植えの野菜を手入れするだけでも気分が変わっていきます。第二に二人、三人と一緒に野菜の手入れをしていると人との間に野菜を共通の話題にした新しいコミュニケーションが自然に生まれてきます。現在都市部では無縁社会化が深刻になってきています。一方職場でもパソコンに向かう時間が長くなり、職場の中でも会話の機会が減ってきています。短い時間でも一緒に野菜に触れれば、距離感がグッと縮まり、親しくなることができます。特に多様な雇用形態の職場では皆が気持ちを合わせて会社の目標を達成するためには、一体感が欠かせません。そのためには普段のコミュニケーションが大事です。

第三に商業施設の場合は買い物の中に楽しく一息入れる場所があれば、例えばお父さん、お子さん達はお母さんが買い物を終える迄ゆっくり待つことができます。

第四にマンションの場合は屋上に菜園とか緑地があれば、テナント満足度が上がり稼働率向上に役立ちます。

第五に物流施設でも、工場でも敷地の隅にでも菜園があれば、ちょっとした楽しみと潤いを感じることができることでしょう。

田畑を都会にそのまま持つてくることのできない相談ですが、農作業は持つてくることができます。菜園は屋上、ベランダ、人工地盤、建物の敷地の空いた箇所、どこにでもつくることができます。JVECは「どこでも菜園」のハードとソフトを持っています。また業態毎の目的に合った運営・利用方法をご提案することができます。

都市の中に身近に菜園をつくり、楽しむ。

いよいよアーバンファームの時代が来ました。

代表理事 阿部義通



2 時代が大きく変わり始めている・ポスト成長時代を迎えて グリーンインフラとヒューマンインフラ

昨年9月に私達思いを共にする者が、時代は大きな転換期にきているように思われます。人口増加から人口減少、そして超高齢化社会へ。経済成長から成熟経済へ。男性中心から男女均等の経済社会へ。仕事中心の生活から私生活も大事にするライフスタイルへの転換。工業中心から工業と農業のバランスのとれた社会へ。競争から共創・共生へ。中央集権的・統合的な管理から分散型・ネットワーク型への転換。転換期のメルクマールはまだまだあることと思いますが、建物の屋上菜園・緑化、都市の田園化を目指している JVEC としては2つの独自のキーワードを強調したいと考えています。

①ハードインフラからグリーンインフラ（環境保全、レジリエンス、自然との共生）

大都市である東京はまさにコンクリートと鉄のビルが林立する人工的な、無機質な、冷たい街になりつつあります。スカイツリーから見下ろす東京の街は建物だけでなく、緑の場所は皇居、神宮外苑、新宿御苑、日比谷公園など限られています。1,300万人という膨大な人口を受け入れるためには仕方がないのかもしれませんが、ヨーロッパの大都市、ベルリン、パリなどと比べても桁違いに多い人口は東京の街を建物で埋め尽くしたと言っても過言ではないでしょう。

江戸時代、過密都市であった江戸でも緑地が多く、江戸府内である朱引内（八百八町）でも農地は47.4%、約半分は農地だったそうです。火事は江戸の華と言われていたから、農地は火除け地の役割も持っていたのかもしれませんが。今日では防災機能、レジリエンス機能とすることができるでしょう。

グリーンインフラ（屋上菜園、空き地菜園、空きスペース菜園）はサステナブル社会を支えるインフラとなり、防災機能も担う社会共通資本ともなっていくと思います。

かつて大平元総理は東京の今後の望ましい発展のために「田園都市構想」の実現を目指されました。この構想は頓挫したようですが、その理念は今でも生きており、有効であると考えています。現在大都市の防災問題がますます重要性を帯び

ていることは衆知の通りです。東京直下型の地震が来たら、と想像しただけでゾッとします。

②ヒューマンインフラ（コミュニティ回復、頭と心と感性のバランス回復）へ

ヒューマンインフラとは安心・安全な生活環境を支える地域・コミュニティを意味します。日本の戦後の高度成長期は、それまであった「昭和の暮らし」「昭和のコミュニティ」を「古いもの」としてないがしろにしていった時期だったのかもしれませんが。大型スーパーの進出により地元のコミュニティでもあった商店街がさびれていきました。そして皮肉なことに大型スーパーもコンビニ、専門店に主役の座を譲りつつあります。都市部に地上げの後マンションが立ち、新しい住民がやってきます。古からの住民とマンション住民が交流する機会のごく限られているようですから、地元でコミュニティをつくるのが難しくなりました。

しかし、子供達を育て、生活していくためにはコミュニティは不可欠ではないでしょうか。私達は地域が住みやすく、働きやすい場所になるためには住民目線の地域デザインが必要でないかと考えています。その際、空き地菜園、空きスペース菜園、屋上菜園をぜひデザインの中に入れてほしいのです。なぜなら日本のコミュニティはその成り立ちから神社・お寺への信仰と地元の土地への愛着の2つの焦点を持った楕円形の形だと言われています。現在では信仰についてはそれぞれ自由ですが、土地、大地への愛着は共通して持てるのではないのでしょうか。特に農耕民族である日本人はどこかで大地の生活に憧れを持っているはず。鈴木大拙師はこうに言っておられます。「大地の生活は真実の生活である」「大地の具体性が即一人の具体性である」（『日本的霊性』）

今後地域デザインの中で、コミュニティデザインの重要性が高まっていくと予想されます。またコミュニティを作り出し、コーディネートしていく思考と人材も。

以上2つのキーワード、グリーンインフラとヒューマンインフラは密接に結びついていると私達は考えています。ただ単に菜園をつくるのではなく、この2つのキーワードを意識しながら、アーバンファームのための菜園の設計、運営を行なっていくことがJVECの基本方針となります。

3 JVECの 具体的事業内容 グリーンインフラとヒューマンインフラ

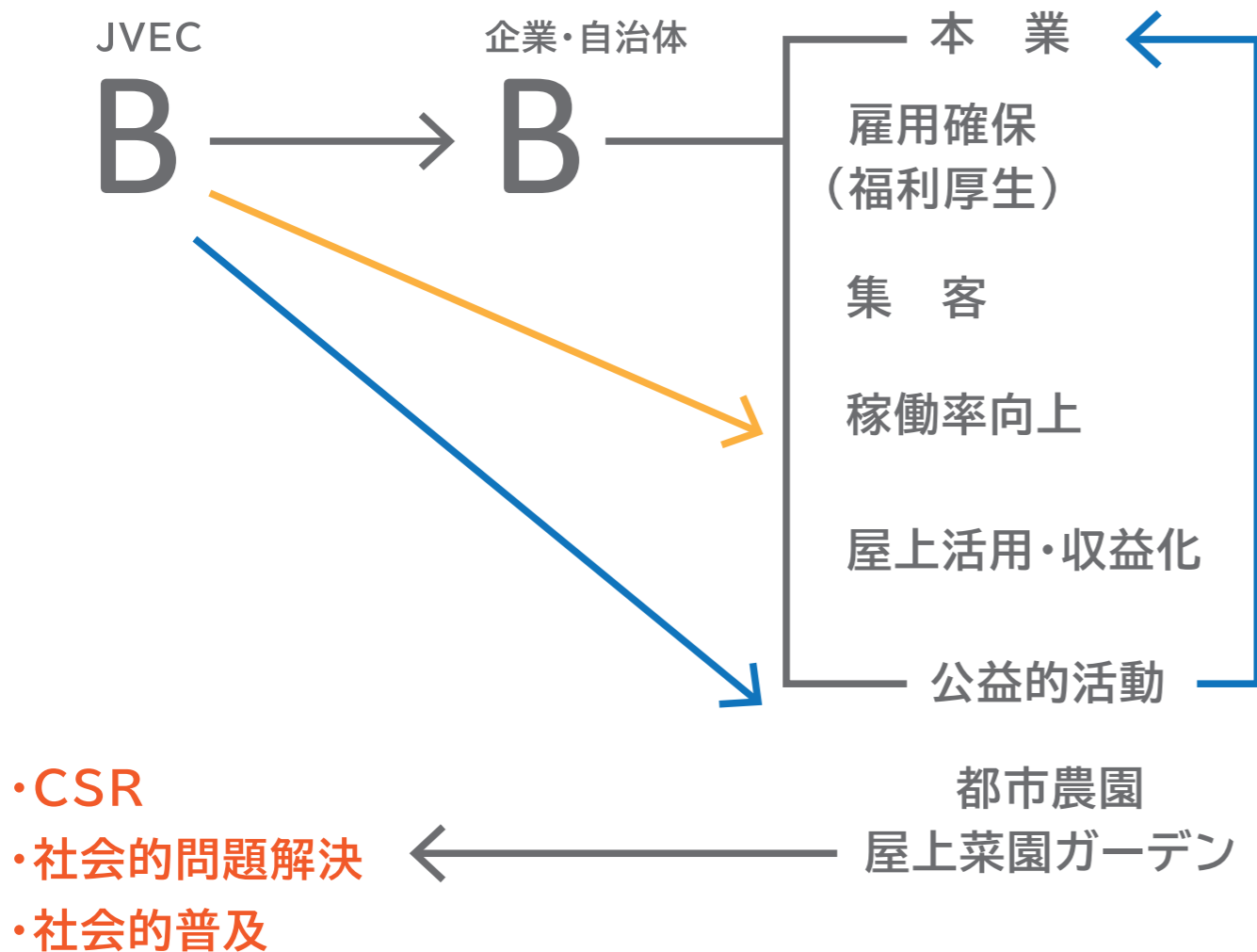
- ①(屋上)菜園の企画、設計、デザイン、施工(設置)
(※施工・設置は会員企業が行います)
- ②(屋上)菜園の栽培管理・運営(栽培指導、イベント含め)
- ③(屋上)菜園の本業への波及効果提案
- ④(屋上)菜園に関する相談、情報提供
- ⑤ビルの屋上の菜園ガーデン化による収益化提案
- ⑥栽培インストラクターの養成
- ⑦地方農家の支援
- ⑧アーバンファーム関係の新商品の開発・認証・販売
(※開発・販売は会員企業が行います)



4

ドメイン① 屋上菜園ガーデン(アーバンファーマーミング)分野

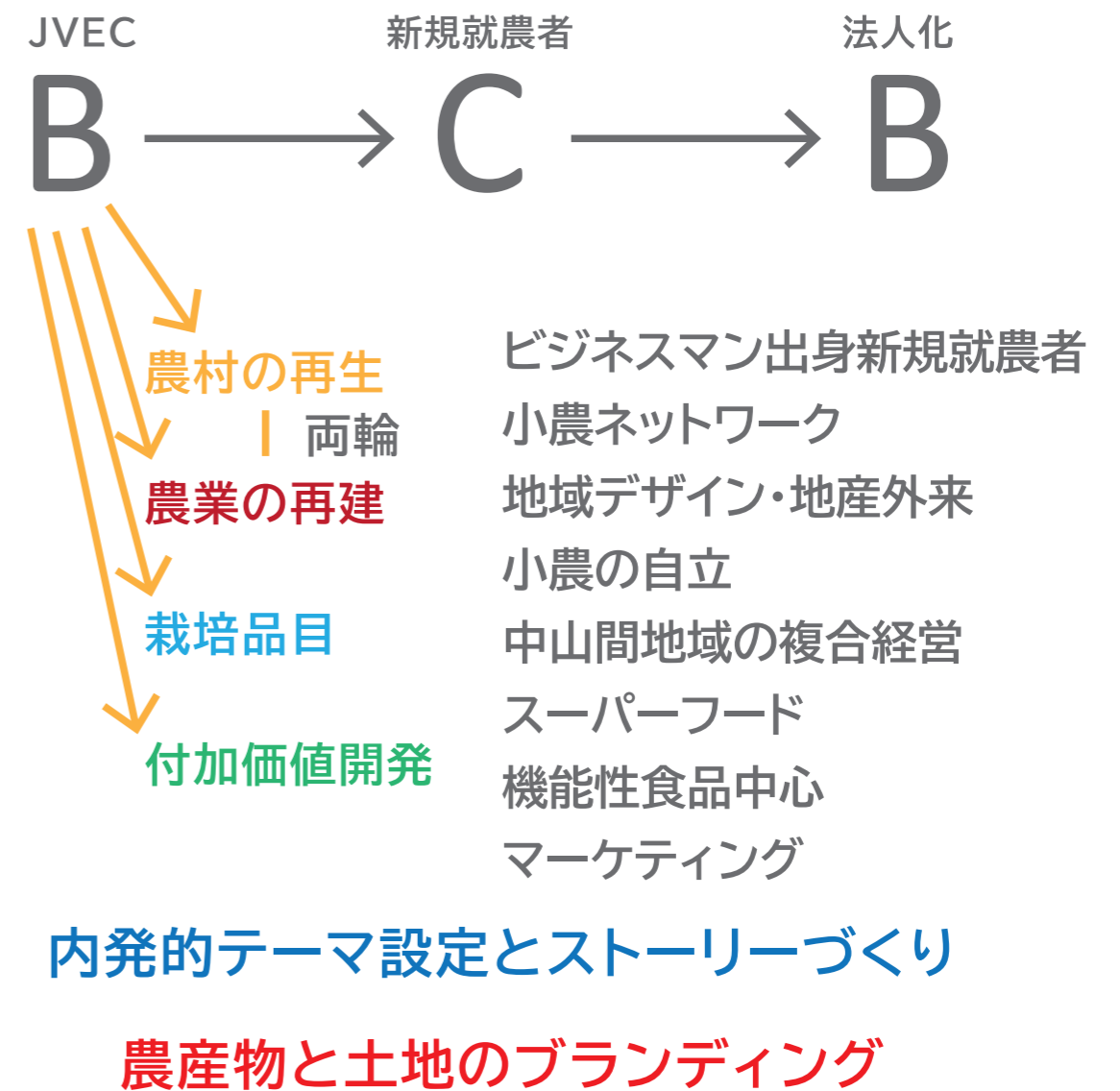
1. 企業の本業に直接的、間接的にベネフィットを提供できる都市農業を展開していく
2. 企業、自治体の公益的活動(社会的活動)に都市農業を通じて連携していく



5

ドメイン② 地方創生分野

1. 地方の内発的・主体的発展を基本とする
2. 新規就農者が早く経済的自立レベルに到達できるように多角的に支援する
3. 農的価値は農産物だけでなく、日本の場合は人間性回復と社会問題解決につながる。生活、文化、コミュニティ、自然との共生、さらには地球環境保全へと「農」の多面的価値を創発していく
4. JVEC型「CSA」(コミュニティが農家を支援する仕組み)を作り上げる
5. 地方に若い人達にとってやりがいのある新しい雇用機会、持続的な産業を興す



6

JVECの活動を支える ユニット・コロニー



7

JJVECの三大特長 (技術面)

- ① たった15cmの土の深さで、葉物、実物、根物野菜を有機栽培
*根物野菜の中で大根、ゴボウなどは別途土厚で対応
 ○土壌が超軽量なので新築の建物だけでなく、既存の建物でも屋上ファームができる
 ○屋上菜園でもこんなに収穫できる、すごい！
- ② 菜園生活セットとロールプランター農法でどこでも菜園
 だれでも菜園、3次元菜園(傾斜面、曲面、垂直)ができる
 ○ロールプランターは農業革命を起こす可能性あり！
- ③ リアルな屋上菜園からバーチャルコミュニティをつくる情報技術
 ○屋上菜園でコミュニティ、アソシエーションづくり

8

ワンストップ受注

- ① 引き合い
- ② 現調
- ③ 企画・提案
- ④ 設計・レイアウト
- ⑤ 見積
- ⑥ 受注
- ⑦ 設置
- ⑧ 栽培管理
- ⑨ 運営管理
- ⑩ 本業へのベネフィット提案



9

アーバンファーム活用事例紹介

- ① 商業ビル 都内大型商業ビル (屋上緑化・菜園開放) 本業にとっての貢献
 ・売上増
 ・スタッフの気分転換 (福利厚生)
- ② オフィスビル 三井住友海上火災保険(株) (地元利用者に屋上菜園を開放) 本業にとっての貢献
 ・CSR
 ・生物多様性
- ③ マンション ミエキ管理 (屋上菜園・緑化) 本業にとっての貢献
 ・知名度アップ
 ・稼働率アップ
- ④ 学校・公共施設 品川区A小学校 (父兄で屋上菜園活動) 社会的問題解決
 ・コミュニティ形成
 ・子供達への食育

10 これからの取り組み

- ① アーバンファームビルの普及 → 栽培技術標準化、関連商品開発
- ② 屋上菜園ガーデン資格制度 → 2017年9月からスタート、補助教材開発
- ③ ビルの屋上の菜園ガーデン化の診断 → 屋上の有効活用、収益化
- ④ 都市と地方を結びつけるCSAの展開 → エゴマ、モリンガ、もち麦などスーパーフードが中心
- ⑤ 各種イベントの開催 → コミュニティ形成

11 最後に

市民皆農、楽しい農作業、人とつながり、地域とつながる

アーバンファームは私達の日々の生活を楽しくし、
職場を活性化し、安定した社会をつくっていく

12 資料

- ① 屋上菜園ガーデンの価値開発
- ② 屋上菜園のリスクマネジメントチャート
- ③ 屋上菜園ガーデン化のための調査シート

